

18

少年の快樂
工薪階級で走る

新世代
どすけべカー

とてつもない時代が到来した。

【少年の快樂度をエネルギーにして走る】というエコというかなんというか……ともかくそういう自動車が登場したのだ。まだまだ富裕層しか購入が許されない高級品ではあるが、買う気がある体で来店すれば試乗はタダである。

俺は一張羅のお高いスーツを着て近所のディーラー店を訪れた。店員は気さくに案内を進めてくれる。どの車がいいか選んでくださいと連れてこられた先の光景に、俺は絶句してしまった。

色とりどりのカラフルな車。その助手席に、やけに太腿を強調した短パンを履いたよりどりみどりの美少年らが据わっている。そして穏やかに微笑み、四方八方から俺に手を振ってくるではないか……！

ムクムクムク。早くもボッキしてしまった。少年愛好者にとって彼らが生身の人間であるということは奇跡以外の何物でもなく、おいなる科学の進歩には頭を垂れずにはいられない。

身寄りのない子ども達が然るべき教育を受けた上でこの新世代カーの動力源として働いている。少年(少女ではダメらしい。科学的にも倫理的にも)の快樂エネルギーがガソリンにも勝るエネルギーとして活用できるとわかってから、貧困を極めた国の動きは早かった。これなら森林を破壊せず空気を汚染せず、要するに地球を守りながらにして便利な生活を営めるのだ。それはもう利用しない手はないだろう。

俺は舌舐めずりしながら少年を吟味する。皆幼く腰が細い。どれも美少年と称するに相応しい顔立ちで、男を誘惑する笑顔も完璧だ。

さんざん悩んだ挙句、俺は茶髪に赤みがかった瞳のお尻が小さなキュートボーイを選んだ。車のデザインや色味なんてもう正直どうでもよかった。

「あは♡ よろしくお願いまーす♡」

「よろしく……か、可愛いネッ……♡」

「えへ♡ うれしい♡ ぼくマスターがはじめてのお客さんなの♡ やさしくしてね♡」

辛抱たまらん！！！！！！

運転席に乗り込むとすぐに少年が膝に乗って媚びてくる。物欲しそうに頬を撫でられて至近距離で見つめてくるので、緊張気味に唇を重ねた。

……チュッ♡

ブワッ。マジでガチで生身の少年とキス。

勢いづいて肩を引き寄せブチュブチュとがつついてしまう。少年も俺の肩を強く掴み返してきて、けたたましいエンジン音が鳴り響いた。

この少年カーは少年とのキスでエンジンがかかる仕様だ。それでも俺はしばらく車を動かそうとせず、少年の唇を夢中で貪ってしまった。

チュッチュッチュツ♡ ジュッジュッジュツ♡ ハアハア♡ ハアハア♡
見つめ合って舌先でレロレロレロレロレロ♡

「最初のキスからこんなにも全力でシてくれるなんて、素敵です……♡」

「ハアッ……！ ごめんよ、あまりにも柔らかくてついっ」

「すごくドキドキしてます♡ もっとキスしてください♡」

少年が自ら舌を出して大胆にレロレロと動かしてくる。その唇がテカっているのはまぎれもなく俺の唾液が塗り付けられているからで……。

気が付いたらまた貪っていた。少年は嬉しそうにくぐもった声を漏らして、スリスリと身体を寄せてくる。

「ハア♡ ハア♡ そろそろ発車しましょう？♡」

「ああ♡ 君を気持ち良くすれば加速するんだよね！？♡」

「はい♡ いーっぱい可愛がってくださいね♡」

言われなくてもそうするに決まってる。俺はその幼い肢体を完全に抱き込んで、ぐいっと胸部分の布をずり上げた。ぷるんと現れる少年の乳◎。舌で転がしてチュパチュパと唇で弾く。車がゆっくりと前進を始めた。自動運転なのをいいことに俺は一切前など見ずに少年の乳首を堪能する。チュパチュパ♡ チュパチュパチュパ♡

「気持ちいいです……もっと♡」

チュパチュパチュパチュパチュパチュパチュパチュパチュパ！！

「ああん～～♡♡」

「んお～～ッ♡♡ もう一回キスしよう！！」

「あん♡」

チュプチュプ♡ チュッチュツ♡

「おっぱいとおくちの交互すごい♡ 一生これしたい♡」

「ンッ♡ ぼくもお♡」

ジュルジュル♡ カミカミ♡ ジュルジュル♡ チュッチュツ♡ レロレロ♡ レロレロ♡
♡ レロレロレロレロ～～♡